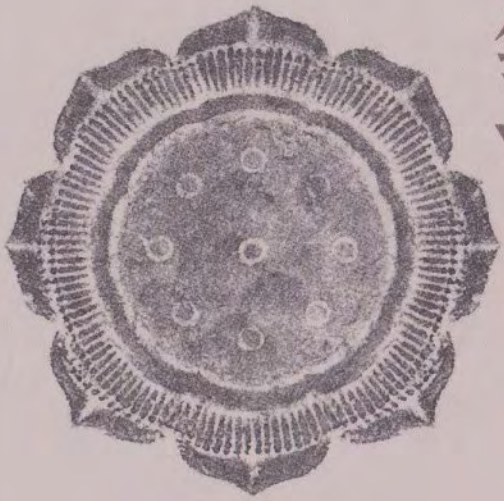
Story of Miidera-Bonsyou

三井寺の鐘

三井晩鐘と
弁慶引摺鐘の由来



目　次

はじめに……1
霊鐘・弁慶の引摺り鐘……2
日本三銘鐘・三井の晩鐘……3
近江八景と三井の晩鐘……5
近江八景の文芸……6
除夜の鐘と伝説……9
伝説・弁慶の引摺り鐘……11
三井の晩鐘銘……19
唱歌・近江八景……21

表紙　三井晩鐘撞座

はじめに　風光明媚な湖南の地

ひとびとが帰路を急ぐ夕暮れ時、琵琶湖に鐘の音が響きわたっていく。ふと立ち止まると、湖面には風をはらんで走る帆舟の影、対岸には三上の山を望み、寝ぐらへと急ぐ雁の姿。まさに近江八景の地、いにしえより数多の文人墨客を引きつけてやまなかった湖国大津の風景です。

江戸時代には東海道五十三次の宿場町として栄えた大津の町も、現在では大きな変貌を遂げましたが、今も昔も変わることなく、ひとびとの感興を深からしめているのが、三井寺の鐘の響きです。

霊鐘・弁慶の引摺り鐘

当寺初代の梵鐘は、奈良時代の古鐘で「弁慶の引摺り鐘」と呼ばれています。伝説によると、むかし承平年間（十世紀前半）に田原藤太秀郷が三上山のムカデ退治の功により、琵琶湖の龍神より頂いた鐘を三井寺に寄進されたものと伝えています。その後、比叡山との争いにより武蔵坊弁慶が奪って山上に引摺り上げ、撞いてみると、「イノー、イノー」と響いたので、弁慶が「そんなに三井寺へ帰りたいのか」と谷底へ投げ捨ててしまったといいます。現に鐘には、この時のものか「ひびり」が入り、あきらかに引摺ったり転がした跡が残っています。鎌倉期の当寺の僧定円がこの時に詠んだと思われる和歌も伝えられて

います。

さざ浪や三井の古寺鐘はあれど
　　むかしにかへる音はきこへず

この他にも多くの伝説を伝えるこの鐘は、三井寺を鎮護する「霊鐘」として重要文化財に指定され、現在は撞かれることもなく金堂西方の霊鐘堂に奉安されています。

日本三銘鐘・三井の晩鐘

当寺二代目の梵鐘が、近江八景「三井の晩鐘」で親しまれている鐘で、古鐘「弁慶の引摺り鐘」の跡継ぎとして慶長七年（一六〇二）、豊臣家による当寺

復興事業の一環として長吏准三宮道澄によって鋳造されました。

現在、除夜の鐘をはじめ日々の入相の鐘として、大津の町々に荘重な調べを届けているこの鐘は、音色のよいことで知られ、古来、形の平等院、銘の神護寺ともに「音の三井寺」として日本三銘鐘のひとつに数えられています。平成八年には環境庁より「残したい日本の音風景百選」にも選ばれました。

総高二〇八・六センチ、口径一二四センチ、目方は六百貫（二二五〇キログラム）。初代「弁慶の引摺り鐘」にならって古式をよく伝え重要文化財の鐘楼とともに滋賀県の文化財に指定されています。

また、鐘の上部には百八個の乳といわれる突起があり、百八煩悩に因んで江戸時代に流行する百八乳をもつ鐘の最古の作例となっています。

近江八景と三井の晩鐘

七景は霧にかくれて三井の鐘

三井晩鐘　粟津晴嵐　瀬田夕照　石山秋月

矢橋帰帆　唐崎夜雨　堅田落雁　比良暮雪

近江八景は、一説には『江陽日記』の伝える明応九年（一五〇〇）八月十三日に、近衛政家、尚通父子が佐々木高頼の招請によって近江に滞在中、政家が八景歌を詠まれたのがはじまりとされていますが、現在では、近衛家十七代当主、三藐院信尹（一五六五～一六一四）が、慶長年間頃に中国瀟湘八景にならい琵琶湖周辺の景勝の地を撰んで近江八景を発案したとする説が有力です。

いずれにせよ中世以降、藤原摂関家の嫡流である近衛家と当寺の縁は浅かな

ぬものがあり、一族の中から多くの長吏職を勤めた高僧を輩出しています。たとえば、政家の実弟である道興、増運、尚通の実子に道増、ことに当寺慶長再興の立役者で、三井の晩鐘の刻銘を草した長吏准三宮道澄は、近江八景の発案者・信尹の伯父に当たることから、三井寺と近江八景の深い関係を知ることができます。

近江八景の文芸

古くは西国十四番札所・三井寺の観音さまの御詠歌にも

いで入るや波間の月を三井寺の
鐘のひびきにあくるみずうみ　花山法皇

と三井寺の鐘が詠われたように、江戸時代になると近江八景・三井の晩鐘は、多くの詩歌文芸や書画に描かれてきました。

思うその暁ちぎる始めぞと
まづ聞く三井の入相の鐘　近衛政家

この和歌は、先述の近衛政家が近江に滞在中に詠んだとされるもので、安藤広重（一七九七～一八五八）の名作「近江八景」の浮世絵に書かれているものです。

うかれ来し春の光の長等山
花にかすめる鐘の音かな　蓮月

三井寺の鐘聞く春の雨夜かな　蓼太

三井寺の鐘はくるるに雉子の声　　几董

門口に来て氷るなり三井の鐘　　一茶

また忘れてならないのは謡曲の「三井寺」です。その舞台となったのも三井寺の鐘で、行方知らずのわが子をたずねて三井寺を訪れた物狂いの母が、「山寺の　春の夕暮来て見れば　入相の鐘に　花ぞ散りける　げに惜しめども　など夢の春と暮れぬらん…　うきねぞ変はるこの海は　波風も静かにて　秋の夜すがら月澄む　三井寺の鐘ぞさやけき」と鐘を撞きながら舞い狂うところは一編の山場となっています。鐘を描いた芸能のうちでも最もすぐれたもののひとつといえるでしょう。

除夜の鐘と伝説

三井の晩鐘を撞いて旧年の厄を払い新年の招福を祈願する当寺の除夜の鐘の行事は、琵琶湖の龍神にまつわる伝説に彩られています。

ある日、湖畔で子供たちが蛇をいじめているのを見た若者は、その蛇を助けてやります。その夜、ひとりの美しい女人が若者の家を訪ね一夜の宿を借りますが、次の日も次の日も出ていこうとはせず、やがて二人は夫婦となり子供を身ごもります。妻は「決して中を覗かないよう」言い残して産小屋に籠もりますが、心配になってきた若者は、約束を破って中を覗いてしまいます。ところが中では大蛇がとぐろを巻いて赤子を取り巻いてい

たのです。気づいた大蛇はしっかりと玉を握りしめた赤子を残してかき消えてしまいました。

残された赤子は握っていた玉をしゃぶりすくすくと育ちますが、やがてこの噂を聞きつけた領主に取り上げられてしまいます。湖畔で若者が困り果てていると、琵琶湖から龍が現れ、「わたしはあの日浜辺で助けていただいた蛇です。あの玉はわが子が無事に育つようにとわたしの眼玉を与えたものです。まだ片方の眼玉がありますから差し上げましょう。ただ、わたしは盲目となってしまいますので、わが子の姿を見ることができなくなります。どうか三井寺の鐘を毎日撞いて子供の無事を知らせて下さい。歳の暮れには一年が過ぎたことが分かるように多くの鐘を撞いて下さい。お

返しにひとびとに幸運を授けましょう」と頼んだ、と伝えています。

以来、三井寺では除夜の鐘に際しては、龍神を慰めるため多くの灯明を献じ、龍の眼玉にちなんだ目玉餅を供え、百八に限らずできるだけ多くの人にできるだけ多く鐘を撞いてもらう特別の儀式が行われています。

伝説・弁慶の引摺り鐘

かつて当寺では、霊鐘の伝説のことなど、大津の俚言のまま地元の古老によって参詣のひとびとにやさしく説き聞かされておりました。いまでも年輩の方で当寺を再訪されることがありますと、よほど印象深かったのか、かつての流暢な大津弁の説明のことを懐かしく思い出されます。

いまここにかつての名調子を紙上に記して、むかしのよすがとする次第です。

えー、この鐘は、承平年間に田原藤太秀郷というお方がご寄附になったんで、秀郷がどうしてこの鐘を手においれやしたかと言いますと、まるでお伽話のようですが口碑に伝わっておりますのでお話をしておりますが、承平元年から五年までの頃、秀郷は大津に住んでおりまして、ある日、草津へ行こうとしやはりまして、瀬田の橋を渡りやしたら、橋の上に大きな蛇が目をむいて、角をはやしてこわい顔してた。それに秀郷は少しもこわがらずに、その蛇をまたげてサッサと東へ行かれると、むこうの方に一人の爺さんがヒョイと立って、われは竜神といって、この橋の下に住むこと数千年になるが、未だかつてあんたみたいな度胸の据わったお方は知らん、

どうか頼みを聞いてくれんかと言われるので、秀郷は何か知らんが頼みなら聞いてあげようと言われますと、竜宮という水の中の結構な御殿へ誘うて行って、酒や肴を出してねぎろうたが、夜分の夜半の頃になると、いま仇が来ましたから討ってくれと言う、仇って何や知らん、と思うて見やはりますと、大きなムカデですから、秀郷は常に弓や矢を携えておられたと見えまして、早速矢を二筋放たれましたが、二本とも当っても通らなんだ、三本目の矢の時に、かの老人がムカデは唾を嫌うからと言ったので、唾を塗って射やはりますと、それがムカデの左の目と眉の間から咽喉へ突き刺って、一本の矢で大きなムカデが斃れました。

蛇がこわがるくらいのムカデですから、どれ程大きさがあったかと言い

ますと、近江富士とたたえる丸い格好のよい山を七巻半まいて瀬田の橋へ頭を出した。これを引き延ばすと十里からあるのでっせ。そんな大きなムカデが出ているのに、誰が七巻まいているやら八巻まいているやら、こおうて教える者はごわへんやろ。それに七巻半まいていたというのは何故じゃろ。あんた方でも、一つ巻いても八巻とおっしゃる。近江富士を一つまくのにチョット足らんと瀬田の橋へ頭出した。それで七巻半というたかも知れまへん。それにしても延長六里からないと、とどかん大きなムカデがたった一本の矢で斃れた。

そんなら、水の中の竜神が陸のムカデを何故嫌ろうたかというと、蛇の子に乙姫様という美しいお姫さんがあった。それをムカデが取りに来るも

んですから恐れていたのが、タッタ一本の矢で斃れたのを見て、非常に喜んで御礼に十の宝物をくれやした中にこの鐘があったので、大津に住居していやはったもんですから、この寺へご寄附になったんです。

これをここにつって三百年程撞いておりましたら、弁慶といえるお方は、紀州熊野の別当職弁戒の息子で、播州の書写山で修行して、比叡山西塔の武蔵坊という寺にいやはりました当時、比叡山には僧侶が三千人いやはるし、当寺には八百五十人よりいやはりまへなんだ、それに同じ天台の本山同士ですから、座主の争いが起り、弁慶が隊長になって征めて来て、そこらを焼いたりクダイたりして、お恥しい事ですが、この鐘を分捕って行かはりました。その時、山や坂を三里半引摺ったので、鐘のむこうべらが

ズーッと摺り切れています。そして大講堂の前につって撞いて見やはりましたら、鐘の音色は出ませずに、ただイノーと響いた。比叡山でイノーと鳴ったら三井寺へ帰りたい鐘や、帰りたけりゃ帰れ、と怒って谷間へ投げ捨てた。その時割れたのがこちらの方で、ズーッとヒビがいってます。

その後三百八十年捨ててあったのを争いが仲直りしてから貰うて帰った鐘です。帰っては来ましたがヒビがいっておりますから、つらずに台の上にのせて置きましたら、ある日気がふれた一人のお女中が、女人禁制のこの山へはいって来て、この鐘は結構な鐘や、鐘には鏡の質が入っているものや、どうかこの鐘で鏡だけを載かせて欲しいと一心に念じて、鐘のぐるりをなで廻わりやしたら、ポカッ！　と鏡の形が取れました。そちらのイ

ボイボの中に取れた所がありまっしゃろ。それが天文十八年の盆の十五日、太閤さんの十四の歳でありました。それからは盆の十五日だけには女人禁制のこの山へ御女中方に入ってこれを見て懺悔して貰う事が許されるようになったんです。明治の御維新からは何れも女人禁制はないようになったんです。弁慶は強い人でした。どうぞヒビのいった所や鏡のとれた所、イボイボがチビレた所を、よう見て帰っておくれやっしゃ。

と語られる伝説は以上のようなものですが、また、この鐘には、寺に変事があるとき、その前兆として不可思議な現象が生じたといいます。良くないことがあるときには鐘が汗をかき、撞いても鳴らず、また良いことがあるときには自然に鳴るといい、『園城寺古記』という戦国時代の記録には、文禄元年（一五

九二）七月に鐘が鳴らなくなてしまい寺に何か悪いことが起こるのではないかと心配した僧侶たちは、様々な祈祷をおこなったところ翌八月になってようやく音が出るようになった。この話を聞いた太閤豊臣秀吉は、これを奇特として鐘楼を新たに造るように当時の大津城主であった新庄直頼に命じた話が伝えられています。しかしながら、この鐘楼はついに完成することなく、三年後の文禄四年には秀吉から当時は闕所の憂き目にあうことになります。

建武の争乱時には、略奪を恐れ鐘を地中に埋めたところ、自ら鳴り響き、これによって足利尊氏軍が勝利を得たといわれるなど、まさに霊鐘というにふさわしい様々な不思議なことがらを今日に伝えています。

三井の晩鐘銘

梵鐘の池の間には上述の由来を記した銘が陰刻されています。

夫当寺之梵鐘者、昔田原藤太秀郷得龍神
請得之龍宮、其後安置於当寺、案其来由曰
天竺祇園精舎艮鐘也、昭々乎見于三井伝記、爾
来雖歴幾計星霜、霊異惟夥実、天下安寧之
擁衛而寺門鎮護之霊宝也、是故秘在之別処、
命鳧氏依昔之軌模新鋳洪鐘、便扣撃警晨

昏云、

願此鐘声超法界　鉄囲幽暗悉皆聞
聞塵清浄証円通　一切衆生成正覚

于時慶長七歳舎壬寅孟夏廿一日

長等山園城寺長吏准三宮道澄誌焉

摂州住吉住

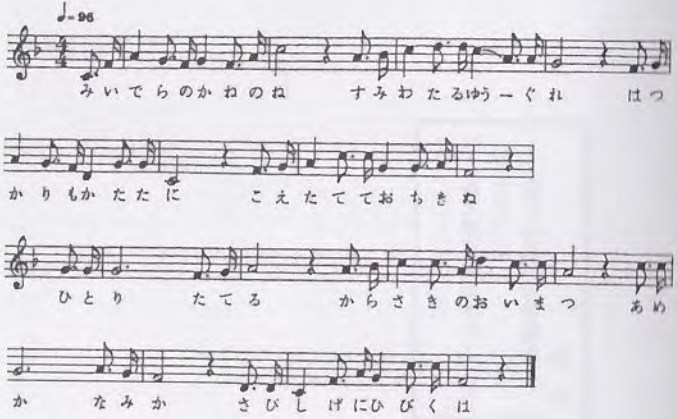
大工杉本出雲守家次

近江八景　教育唱歌

一、三井寺の　かねの音
澄み渡る　夕暮れ
はつ雁も　堅田に
声たてて　落ち来ぬ
ひとり立てる　唐崎の老松

二、雨か波か　寂しげに響くは
今もなお　身に泌む
粟津野の　秋風
いずかたぞ　昔の
兼平の　いしぶみ

三、瀬田の夕日　とこしえに寂しく
比良の暮雪　いつ見ても美し
月のかげ　さやかに
すみのぼる　石山
千代かけて　しのぶは
紫の　その筆
山田矢走　みえ渡る名どころ
さしてかえる　舟の帆も三つ四つ



〒五二〇―〇〇三六
滋賀県大津市園城寺町二四六
天台寺門宗
総本山園城寺事務所
発　行